

酒文化研究所

NEWS LETTER

第 19 号 2014 年 7 月 25 日

【酒文化エポック 地ビール解禁】

地ビール解禁から 20 年

プレミアム市場とともに伸びるクラフトビール

最近、小規模なブルワリーがつくる個性的なクラフトビールの人気が高まっています。「オクトーバーフェスト」や「けやき広場ビール祭り さいたま新都心」など、クラフトビールを楽しめるビールフェスティバルはどこも大盛況、専門のビアパブだけでなく、一般的なレストランや居酒屋にもクラフトビールをメニューに加えるところが珍しくなくなりました。（詳細は弊社誌 16 号「日本で広がり始めたクラフトビール」を参照）

日本におけるこうした変化の基点は、今からちょうど 20 年前の 1994 年のビール製造免許の緩和、いわゆる「地ビール解禁」です。当時の細川政権は規制緩和による経済活性化策のひとつとして、ビール製造免許の最低製造数量の条件を大幅に引き下げました。これで小規模なブルワリーがビール製造に参入できる道が開け、大規模なビールメーカーの寡占状態にあった市場の多様化が進む下地ができます。

また、時を同じくして酒税の安い発泡酒規格のビール風飲料『ホップス 〈生〉』をサントリーが発売しました。価格のバラエティがほとんどなかった日本のビアテイスト市場に、初めてエコノミー市場が生まれ、急速にシェアを拡大していきます。

この 2 つの意味で 1994 年という年は、その後の日本のビール類市場を方向づけたと言えるでしょう。今回は「地ビール解禁」前後の日本のビール市場を振り返ります。

【お問い合わせ】 本資料に関するお問い合わせは下記まで。

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 3-3-14CM ビル

株式会社酒文化研究所（代表 狩野卓也）<http://www.sakebunka.co.jp/>

TEL03-3865-3010 FAX03-3865-3015

担当：山田聡昭（やまだ としあき）

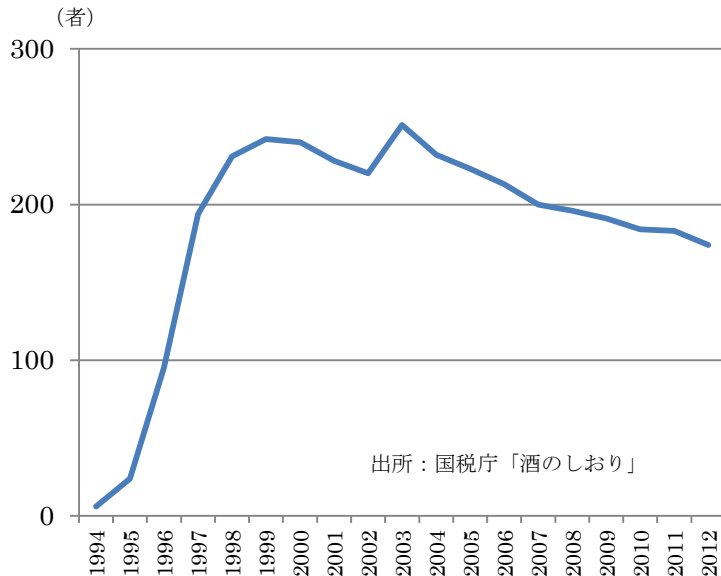
E メール：yamada@sakebunka.co.jp

人と社会にとってよい酒のあり方を考える 酒文化研究所

解禁後の3年で200軒超のブルワリー誕生

1994年にビール製造免許の条件として定められていた最低製造数量（免許業者として1年間に製造しなければならない最低数量）が、2000klから一気に60klに引き下げられました。これ以前はビール製造に参入には、巨額の投資と量販の仕組みが必要で、個人での参入は実質的に不可能でしたが、引き下げにより小さな規模でスタートできるようになりました。これが「地ビール解禁」です。

地ビール（クラフトビール）メーカー数の推移



解禁されるとビール製造に乗り出すものが続々と現れました。地ビールのブルワリー（工場）には飲食施設を併設したところが多く、開業すると地元のマスコミが大きく採りあげ、たくさんの観光客でにぎわいました。「地ビール」ブームは全国各地に広がり、解禁の3年後の1997年には地ビールメーカーは200者を超えるまでになりました。

参入した者でもっとも多かったのは既存の酒造会社です。地ビール進出第一号となった『エチゴビール』を製造した上原酒造（新潟県）は老舗の清酒メーカーでした。『独歩ビール』の宮下酒造（岡山県）、『梅錦ビール』の梅錦山川（愛媛県）、『オゼノユキドケ』の龍神酒造（群馬県）、『さがみビール』の黄金井酒造（神奈川県）、『多摩の恵』の石川酒造（東京都）、『常陸野ネスト』の木内酒造（茨城県）など各地の有力な清酒メーカーが相次いで



石川酒造（東京都）は本社の敷地内にビール醸造所とレストランを設けて参入



黄金井酒造（神奈川県）は酒蔵にビール醸造所をつくり、近隣にレストランを開業してビールを提供



木内酒造（茨城県）は昔ながらの酒蔵の一角にビールの醸造所を設けてスタートし（左）、販売量の増加に伴い 2008 年に新たにビール専用の額田醸造所を建設した（右）

参入し、ほぼ 1/4 を占めていました。

清酒メーカーが参入した理由は、欧州の伝統的なビール産地であるドイツやベルギーでは、町ごとに小さなブルワリーがあり豊かなビール文化を担っていたことや、北米で小規模なビールメーカーのつくる個性的なビールが人気を博しプレミアム市場を形成し始めていたことを知っており、日本においても地ビールを将来的な成長市場になると評価していたことが第一でしょう。さらに酒類の製造販売の豊富な経験を生かすことができること、既存の販売ルートを通じて販売が見込めること、冬期に限定された清酒製造を夏期にはビール製造が補完すると目されることなどが、参入を強く動機づけたと考えられます。

その他に地ビールに参入した者は、外食・観光業者（『よなよなエール』/長野県など）、酒販業者（『箕面ビール』/大阪府など）、食品販売・加工業者（『コエドビール』/埼玉など）、地方自治体が第三セクター方式で創業するなど、さまざまな顔ぶれでした。



最初から中規模のビール醸造所を目指したヤッホーブルーイング（長野県）はビール製造に特化し飲食施設を持たずにスタート。母体は星野リゾート。

大正期には寡占市場に

ところで地ビール解禁前までのビール市場はどのように形成されたのでしょうか。

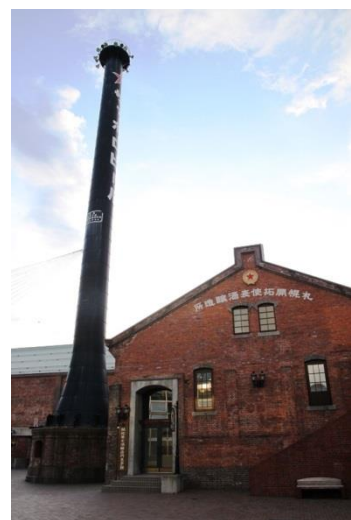
日本で最初の本格的なビール醸造所は、アメリカ人のウィリアム・コーブランドが 1870 年（明治 3 年）に横浜の山手地区に開設したスプリング・バレー・ブルワリーです。この事業を引き継いだジャパン・ブルワリーが 1888 年に『キリンビール』を発売、さらに 1907 年に麒麟麦酒株式会社に引き継がれて今日に至ります。大阪では 1872 年（明治 5 年）に渋谷庄三郎がアメリカ人技師の指導でビールをつくったと言われており、堂島に記念碑が建



横浜の山手地区にある麒麟麦酒開源記念碑。この近くに当時使用していた井戸も残っている



アサヒビール吹田工場に保存される、1899年の創業当時の工場の壁



札幌開拓使麦酒醸造所当時のル工場。現在はサッポロファクトリー（商業施設）として活用されている

てられています。現在まで続くビールメーカーとしては、1899年（明治22年）にアサヒビールの前身である大阪麦酒株式会社が発足しました。それよりも早く1876年（明治9年）にサッポロビールにつながる札幌開拓使のビール事業がスタートし、この3社がその後長く日本のビールをリードします。

3社が製造したのはいずれもドイツのラガービール（下面発酵）です。このタイプは冷蔵技術や酵母の純粹培養技術の発達によっていち早く大量生産のシステムを確立し、清涼感のある味わいも評価されて世界中に広がりました。当時の日本には小規模なビールメーカーもたくさんあったのですが、多くはイギリスのエールビール（上面発酵）を範としたビールづくりで、高品質なビールを生み出すラガービールの大量生産システムとの競争に敗れ、次第に衰退して行ったのでした。



明治前期には中小のビールメーカー全国各地に点在していた。多満自慢『資料館』（石川酒造・東京都）

エコノミー市場とプレミアム市場を開拓したサントリー

キリン、アサヒ、サッポロという大規模なビールメーカーの寡占状態にあったビール市場でしたが、戦後になると新たに参入する会社が登場します。まず甲類焼酎のトップメーカーである宝酒造（京都府）は1957年（昭和32年）に『タカラビール』を発売、急成長

していたビール市場に打って出ます。しかし、先行する3社の壁は厚く、販売ルートを確立できずに10年後の1967年（昭和42年）に撤退を余儀なくされました。前後して1963年（昭和38年）に洋酒のトップメーカーであった寿屋（大阪府）が参入します。1961年に社長に就任したばかりの佐治敬三氏は、社名をサントリーに変更し、順調だった洋酒事業に



サントリーの最初の麦酒工場であるサントリー武蔵野ビール工場（東京都）
写真提供：サントリーホールディングス株式会社

安住することなく、巨大なビールメーカーに挑んだのでした。まさに創業以来の「やってみなはれ」という旺盛なチャレンジ精神を体現する取り組みです。

サントリーのビール事業は厳しい販売戦を粘り強く戦い、1994年（平成5年）に発泡酒規格のビアテイスト飲料『ホップス 〈生〉』を発売し、均質だったビール市場に初めてエコノミークラスを開拓します。この市場は急成長を遂げ、現在ではビール類市場のほぼ半分が発泡酒および新ジャンル規格のビアテイスト飲料となりました。さらにビール事業参入から40年後の2003年（平成15年）に『ザ・プレミアム・モルツ』を発売、今度はプレミアムビール市場を開拓し、この成功でサッポロビールを抜いてシェア3位に浮上します。

プレミアムビールとともに成長するクラフトビール

地ビール解禁後に急増した小規模ブルワリーでしたが、ブームが終息すると厳しい局面を迎えます。個性的な味わいは「高くてまずい」とまで言われて撤退が相次ぎました。一方でビールづくりに情熱を傾けるブルワリーのビールを、クラフトビールと呼ぶ愛好家が登場して回復の兆しが見え始めます。変化は2003年頃、ちょうど『ザ・プレミアム・モルツ』発売のタイミングに重なります。

ここからクラフトビール（地ビール）は成長に転じ、1社当たりの売上高は着々と増加、最近では飲食店に醸造所を併設した超マイクロブルワリーが続々に登場したり、キリンビールがクラフトビール事業に本格参入を発表したりするなど、大手メーカーの寡占で均質だったビール市場は変化を鮮明にしたのでした。■

